

1. 平成30年度調査および結果の特徴

平成30年度調査問題は、学習指導要領の理念・目標・内容等に基づくものとし、小学校の調査問題については小学校第5学年までに、中学校の調査問題については中学校第2学年までに十分に身に付け、活用できるようにしておくべきと考えられるものを、各領域等からバランスよく出題された。その際、「4年間のまとめ」（国立教育政策研究所において、平成19～22年度の4回の調査結果を分析して、「成果」と「課題」を整理した報告書）で指摘した課題や平成24年度～29年度調査で見られた課題についての改善状況を把握する観点からの問題も出題された。今回の調査結果から、これまでの調査で見られた課題について依然として課題の見られるものがある。一方、今回の調査を見る限り、改善状況が見られたものもあるが、これらについても引き続き注視が必要である。

小学校及び中学校の調査結果は次のとおりである。

	依然として課題が見られるもの	改善状況が見られたが、引き続き注視が必要なもの
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くこと。 ・話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめること。 ・複数の資料の内容を関係付けて理解できたり、表現したりすること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手や目的に応じ、事例を挙げながら筋道を立てて話すことや、慣用句の意味を理解し、使うこと。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・小数の除算の意味について理解すること。 ・グラフから読み取ったことに基づいて適切に判断すること。 ・日常生活の事象を、数量を関連付け、根拠を明確にして記述すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・異種の二つの量のうち、一方の量がそろっているときの混み具合の比べた方を理解すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・観察・実験の結果を整理し分析して考察した内容を記述すること。 ・予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想したり、実験結果を基により妥当な考えに改善し、その内容を記述すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察、実験の結果を整理し分析して考察すること。

	依然として課題が見られるもの	改善状況が見られたが、引き続き注視が必要なもの
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて文章を読む際などに、情報を整理して内容を的確に捉えること。 ・文の成分の順序や照応、構成を考えて適切な文を書くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場面の展開や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解すること。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること。 ・数学的な結果を事象に即して解釈することを通して、成り立つ事柄を判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明することに説明すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平面図形の運動による空間図形の構成についての理解、球が回転体としてどのように構成されているか理解すること。 ・見取図、投影図から空間図形を読み取ること。 ・比例における比例定数の意味の理解。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・実験や条件制御などにおいて、自分や他者の考えを検討して改善すること。 ・自然の事物・現象に含まれる要因を抽出して整理し、条件を制御して実験を計画すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した知識・技能を活用して、観察・実験の結果を分析して解釈すること。

上記の分析結果は、全国の各設問の平均正答率や正答数分布の状況等から明らかになったことであり、この平均正答率や正答数分布は、熊取町と全国、大阪府との間で若干の差はあるものの、概ね同じ傾向にある。(次頁の正答数分布図参照)

したがって、これらの結果の特徴や課題は、熊取町を含め小学6年生及び中学3年生全体の課題であると言える。

また、熊取町の平均正答率を全国の結果と比較すると、小中学校とも、算数A(数学A)を除いて全国平均をやや下回った。

大阪府との比較では、小学校においては、算数Aおよび理科を除いて下回り、中学校においては、国語Aのみ大阪府平均をやや下回る結果となった。

2. 学力調査から明らかになった課題と今後の取り組み

(1) 国語の課題

今回実施された「平成30年度全国学力・学習状況調査」における国語の状況については、小学校国語A、Bおよび中学校国語Aにおいて全国・大阪府平均を下回る結果となった。中学校国語Bにおいては、全国平均を下回るも、大阪府平均を上回る結果となった。

また、出題内容において、小学校では国語A・Bの領域・観点・問題形式別の平均正答率の状況から、ほとんどの項目で全国・大阪府平均を下回る結果となった。中学校では、国語A・Bの領域・観点において、「読むこと」については全国・大阪府を上回る結果となった。しかし、その他の領域・観点・問題形式別の正答率は全国・大阪府平均を下回る結果となった。

無解答率については、おおむね全国・大阪府より低い結果となったが、問題形式が短答式・記述式の問題の場合に無解答率が高くなる傾向が見られた。

小学校では、知識の面において、「文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書く」こと、「漢字を文の中で正しく使う」ことの一部など、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項に課題がみられた。

また、活用の面においては、「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる」こと、「目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書く」こと等、学習指導要領の領域の「書くこと」に課題が見られた。その中でも特に問題形式が記述式である場合に課題が顕著に表れることが分かった。これらについては、昨年度の課題としてあげた、「目的や意図に応じ必要な内容を整理して書く」（「書くこと」）や、「自分の考えを広げたり深めたりする発言の意図を捉える」（「読むこと」）に、引き続き課題があることが明らかとなった。

中学校では、知識の面において、「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う」ことの一部と「目的に応じて文の成分の順序や照応、構成を考えて適切な文を書く」こと等、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項に大きな課題が見られた。

また、活用の面においては、「目的に応じて文章を読み、内容を整理して書く」こと、「相手に的確に伝わるように、あらすじを捉えて書く」等、学習指導要領の領域の「書くこと」に課題が見られた。昨年度と同様に「書くこと」について課題が有り、その中でも特に問題形式が記述式である場合に正答率の低さが顕著に表れることが分かった。

児童質問紙調査ならびに生徒質問紙調査においては、今年度国語科の授業に直接関係する質問事項はなかった。しかし、算数・数学科および理科に関する質問のうち、今回の問題について、「解答を文章などで書く問題がありましたが、最後まで解答を書こうと努力しましたか」と国語Bの正答率に小学校・中学校ともに相関関係が見られた。

このことから、他教科においても目的に応じて書くことが求められており、国語で育まれる「書くこと」は重要であると考えられる。

(2) 国語力向上に向けての方策

知識（A調査）において、小学校・中学校ともに、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の イ 言語の特徴やきまりに関する事項 に課題が見られた。具体的には、小学校では「修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと」、中学校では「文の中の文の成分の順序や照応、文の構成について考えること」に課題があり、これらは「文と文章」についての指導事項に関するものである。

また、活用（B調査）においては、「書くこと」に課題が見られ、具体的には、小学校では「事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること」、中学校では「事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと」に課題があり、これらは、「考えの形成・記述」についての指導事項に関するものである。

これらのことから、指導事項の系統性および国語の授業を改善するための方策を示す。

[1]言語の特徴やきまりに関する事項について

〔知識及び技能〕（1）言葉の特徴や使い方に関する事項

○ 文と文章 についての指導事項の系統性について以下にまとめる。

	学年	指導事項
小学校	第1学年及び第2学年	カ 文の中における主語と述語との関係に気づくこと
	第3学年及び第4学年	カ 主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句
	第5学年及び第6学年	カ 文の中での語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること
中学校	第1学年	エ 単語の類別について理解するとともに、指示する語句と接続する語句の役割について理解を深めること
	第2学年	オ 単語の活用、助詞や助動詞などの働き、文の成分の順序や照応など文の構成について理解するとともに、話や文章の構成や展開について理解を深めること
	第3学年	ウ 話や文章の種類とその特徴について理解を深めること

○ 文の中における主語と述語、修飾と被修飾との関係などに注意する

- ・ 文書の内容を理解するためには、それぞれの文の中での語句の役割や、語句相互の関係に気をつけて、文がどのように組み立てられているかを理解することが大切である。

主語と述語は、文の骨格をなし、明確な文を書く上で最も基礎となるものである

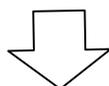
る。主語と述語との照応関係が大切であるということについて、文や文章を理解したり表現したりするときに強く意識できるように指導することが必要である。さらに、修飾と被修飾との関係をはっきりとさせるとともに、「だれが」「いつ」「どこで」「なにを」「どのように」「なぜ」などという文の構成について、初歩的な理解ができるように指導することが必要である。

以下は、これらのことを踏まえ、小学校における発達段階に則した方策である。

〔第1学年・第2学年〕

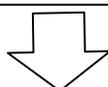
例えば、「はしった。」「かいた。」など、述語のみの文を提示し、主語を補って多くの文を作らせる。そして、補った主語の中には、人物を表す「誰は（が）」だけでなく、事物や動物などを表す「何は（が）」に当たるものがあることを意識させる。

さらに、主語と述語とが照応していない文を提示し、述語との関係を考えながら主語を補ったり、置き換えたりするなど、主語と述語を照応させるようにする。



〔第3学年・第4学年〕

例えば、主語が整った複数の文を提示し、述語を、物の名前を表す語句（「何だ」）や動きを表す語句（「どうした」）、様子を表す語句（「どんなだ」）の三つに分類することが考えられる。特に、様子を表す語句の中には、語尾が「～だ」（形容動詞）だけでなく、「～（し）い」（形容詞）があることも捉える必要がある。



〔第5学年・第6学年〕

低学年の「(カ)文の中における主語と述語との関係に注意すること。」、中学年の「(キ)修飾と被修飾との関係など、文の構成について初歩的な理解をもつこと。」を受け、高学年では、文の中での語句の係り方や照応の仕方に気付き、いろいろな文の構成があることについて理解することができるように指導することが大切である。

例えば、構造からみて、単文・重文・複文に分けたり、性質や機能からみて、平叙文、呼び掛けや疑問文、応答を表す文、命令や承諾を表す文、推定や伝聞を表す文、感動や感嘆を表す文に分けたりすることなどが考えられる。

○ 文の成分の照応について理解する

- ・ 文の成分の照応について学習する際には、語順の違いによって伝わり方がどのように変わるのかについて考えることなどを通して、文の成分の順序に関心をも

つことができるように指導する必要がある。その際、主語と述語、修飾語と被修飾語などの文の成分の名称と結び付けながら確認することが大切である。例えば、書いた文章を読み返す際に、推敲の観点の一つとして取り上げ、語順や語の照応による表現の違いについて検討するなどの学習活動に取り組んでいく。

[2]言語の特徴やきまりに関する事項について

[思考力、判断力、表現力等] B 書くこと

○ 考えの形成・記述 についての指導事項の系統性について以下にまとめる。

	学年	指導事項
小学校	第1学年及び第2学年	ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫すること。
	第3学年及び第4学年	ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫すること。
	第5学年及び第6学年	ウ 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事例と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方工夫すること。
中学校	第1学年	ウ 根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。
	第2学年	ウ 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わるように工夫すること。
	第3学年	ウ 表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること。

○ 目的や意図に応じ、複数の資料から適切な内容を取り上げて、詳しく書く指導の充実（小学校）

- ・ 自分の考えたことや伝えたいことが相手に十分に伝わるように書くためには、複数の資料から情報を得て、詳しく書くことが必要となる場合がある。その際、得られた情報の中から目的や意図に応じて適切な内容を選択したり、関係付けて捉えたりすることが大切である。また、情報の何をどのように取り上げて、詳しく書けば効果的であるかを整理して書くことができるように指導することが大切である。

○ 目的に応じて相手に分かりやすく書く指導の工夫（中学校）

- ・ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように書く力を身に付けるために、分かりやすい説明や具体例を加えたり、表現しようとする内容に最もふさわしい語句を選んで描写を工夫したりするように指導する必要がある。その際、ポスターやパンフレット、手紙、新聞などの多様な形式の中から、目的や効果を考慮して選択した上で、読み手に分かりやすく伝えるための記述や構成の工夫などについて考えるように指導することが大切である。また、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の指導との関連を図り、話し言葉と書き言葉との違いや、文の中の文の成分の順序や照応、文の構成などについて考えたり、事象や行為などを表す多様な語句について理解を深め、実際の表現に生かしたりするように指導することも重要である。

これらのことを踏まえ、以下のような言語活動を通して指導に取り組んでいく。

	学年	言語活動例
小学校	第1学年 及び第2学年	ア 身近なことや経験したことを報告したり、観察したことを記録したりするなど、見聞きしたことを書く活動。 イ 日記や手紙を書くなど、思ったことや伝えたい事を書く活動。
	第3学年 及び第4学年	ア 調べたことをまとめて報告するなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動。 イ 行事の案内やお礼の文章を書くなど、伝えたいことを手紙に書く活動。
	第5学年 及び第6学年	ア 事象を説明したり意見を述べたりするなど、考えたことや伝えたいことを書く活動。
中学校	第1学年	ア 本や資料から文章や図表などを引用して説明したり、記録したりするなど、事実やそれを基に考えたことを書く活動。 イ 行事の案内や報告の文章を書くなど、伝えるべき事を整理して書く活動。
	第2学年	ア 多様な考えができる事柄について意見を述べるなど、自分の考えを書く活動。 イ 社会生活に必要な手紙や電子メールを書くなど、伝えたいことを相手や媒体を考慮して書く活動。
	第3学年	ア 関心のある事柄について批評するなど、自分の考えを書く活動 イ 情報を編集して文章にまとめるなど、伝えたいことを整理して書く活動。

- (参照)「平成 21 年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校・中学校」
「平成 27 年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校・中学校」
「小学校・中学校 学習指導要領解説 国語」

(3) 算数・数学の課題

今回実施された「平成 30 年度全国学力・学習状況調査」における算数・数学の状況について、小学校では、算数 A は全国・大阪府平均を上回り、算数 B は全国・大阪府平均を下回る結果となった。

中学校では、数学 A・B とともに大阪府平均を上回り、全国平均をやや下回る結果となった。

学力調査の結果から、小学校では、「数と計算」領域においておおむね理解できているものの、除法の意味について理解することに課題が見られた。また、「図形」領域では、示された表現方法を基に、空間の中にあるものの位置を表現することや円周率の意味について理解することに課題が見られた。記述式の設定では、質問紙調査において、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答している割合は、全国・大阪府に比べて低いものの、無解答率がほとんどの設問に対して全国・大阪府より低かった。しかし、正答率が低い設問があることから、解答の説明の内容が不十分であったと考えられる。

中学校では、「関数」領域の設定で一次関数の意味を理解していることに課題が見られた。また、中学校でも記述式の設定では、質問紙調査において、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答している割合は全国・大阪府に比べて高く、無解答率がほとんどの設問において全国・大阪府より低かった。最後まで解答しようとして努力した様子が見える。また、正答率も全国と同等で、大阪府を上回っている。

これらのことから、全国・大阪府と同様に、小学校・中学校とも、児童・生徒の基礎的・基本的な力については定着しているものの、思考力・判断力・表現力等に課題があることが考えられる。それらの力を計画的・継続的に育てていくとともに、算数・数学においては学習内容の系統性が高いことから、小学校・中学校の系統性を意識した授業改善を続けていく必要がある。

平成 30 年度の児童生徒質問紙調査では、「算数・数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」の質問に、肯定的な回答をした児童生徒の割合は全国・大阪府より低くなっている。このようなことから今後は、学習課題をより児童生徒の生活と関係の深いものにし、児童生徒の興味関心を引き出し、主体的に学べる学習課題の設定が必要である。

また、調査対象生徒は、平成 27 年度調査実施時には小学 6 年生であった。そこで平成 27 年度と平成 30 年度結果の比較について考える。平成 27 年度の小学 6 年時は、児童質問紙調査によると「算数の勉強は好きですか」、「算数の授業の内容はよく分かりますか」、「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」の質問に、肯定的な回答をした児童の割合は全国・大阪府より高くなっている。しかし、中学 3 年生時の生徒質問紙調査では、「数学の勉強は好きですか」、「数学の授業の内容はよく分かりますか」、「数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」の質問に、肯定的な回答をした生徒の割合は全国・大阪府より低くなっている。

これらのことを考慮して、中学校においては他の教科との関連を十分に考え、これまでに以上に「先生が教え込む授業」から「子どもが学び取る授業」へ転換する必要がある。そのためには学習課題の設定において生徒が課題を受けとめた段階で自分の問題として受け止められるような課題を設定し、生徒が主体的に課題解決に取り組める授業改善が求められる。

(4) 算数・数学の学力向上のための方策

小学校・中学校に共通して、児童・生徒の思考力・判断力・表現力等に課題が見られる。そこで、それらの力を育み、算数・数学の学力向上の方策を以下に 4 点示す。

1. 「目的を持って見通しを立てたり、結果を振り返ったりする」指導の充実

授業づくりのポイントとして以下の学習過程の充実に取り組んでいく。

【授業づくりのポイントを 5 つの段階にわけた学習過程】

- | | |
|----------|----------------------|
| ①出 合 う | 課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合う |
| ②結び付ける | 既存・既習の知識・技能と結びつける |
| ③向 き 合 う | 自分の力を頼りに一人で課題に向き合う |
| ④つ な げ る | 友だちの考えをつなぎ、考えを深める |
| ⑤振 り 返 る | 自分の学びを振り返り、自己評価を行う |

【出典】 「大阪の授業STANDARD」 平成 24 年 5 月大阪府教育センター

このうち、②結び付けるの場面において、既存・既習の知識・技能と結びつけるとともに、その知識・技能をつかって課題解決の方法と結果について見通しを立てることが大切である。また、そこで立てた見通しをもとに、結果を振り返る活動を充実させていく必要がある。

例えば、問題解決の方向を話し合う場面で、式を用いて解決する方法を取り上げるのであれば、何についての式か、何を求めればよいかを確認する中で説明を洗練していくことも考えられる。その上で、予想した事柄について説明する活動を設定することが大切であ

る。また、予想する際には、正しい予想だけでなく、誤った予想も取り上げ、全体でそれらが正しいかどうかを説明していく活動を取り入れることが大切である。

2. 児童・生徒が主体的に関わる授業づくりの充実

形式的な計算・測定の処理だけでなく、日常の事象と関連付けたり、児童・生徒が主体的に関わる場面を設けたりすることが重要となる。そのためには、算数的活動・数学的活動の充実と、言語活動の充実が必要である。

③向き合うや④つなげるの場面では、解決へのプロセスをノートに記述したりする活動が必要であると考えられる。

例えば、式の指導においては、単に計算するだけでなく、具体的な場面に対応させながら、事柄や関係を式に表すことができるようにする。さらに、式を通して場面などの意味を読み取り言葉や図を用いて表したり、式で処理したり考えを進めたりすることが大切である。さらに、式を、言葉、図、表、グラフなどと関連付けて活用し、自分の考えを説明したり、分かりやすく伝え合ったりできるようにすることが大切である。

3. 系統的・継続的な学びの充実

思考・判断したことを的確に表現することができるようにするために、系統的に数学的な思考力・表現力を高める指導計画を考える必要がある。校種間での内容の関連を捉え、授業で配慮・工夫すべきことを捉えることが重要である。

4. 授業において、説明する際の記述内容を明確にした指導

小学校・中学校に共通して、記述式の設定では、無解答率は全国・大阪府より低く、解答しようと努力した様子が見られるが、正答率が低い設問があることから、解答の説明の内容が不十分であったと考えられる。そのため、算数・数学科においては、言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて、筋道を立てて説明したり論理的に考えたりして、自ら納得したり、他者を説得したりできることが大切である。その際、何を記述し、何を説明すればいいのか、その内容を明確にしながらい指導していくことが必要である。

これらの上記1～4の方策が、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながるものと考えられる。

(5) 理科の課題

今回実施された、「平成30年度全国学力・学習状況調査」における理科の現状については、小学校の平均正答率が全国平均を若干下回ったが、大阪府平均を上回った。中学校では、大阪府平均と同水準であったが、全国を下回る結果となった。

小学校では、「回路を流れる電流の流れ方について、自分の考えと異なる他者の予想を基

に、検流計の針の向きと目盛を選ぶこと」および「食塩水を熱したときの食塩の蒸発について実験を通して導き出す結論を書くこと」の正答率が低いことから、予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できることや、実験結果を基に自分の考えを改善したりすることに課題があると考えられる。

中学校では、「アサリの出す砂の質量と明るさの関係を考察する問題」において、1つの要因を変えるとその他にも変わる可能性のある要因を指摘することに課題が見られたほか、「ガスバーナーの空気の量を変えて、炎の色と金網につくスス（炭素）の量を調べる」について、考察を条件制御の視点から見直し、空欄に適切な言葉を記述する問題、および「密閉した透明な容器の中に鉢植えの植物を置くと、湿度は上がるか」について、自然の事物・現象に含まれる要因を抽出して整理し、条件を制御して実験を計画する問題でも課題が見られた。

問題形式別では、全国、大阪府の傾向と同様に記述式のうち化学的領域の一部と、地学的領域における正答率が低かった。考察したことを適切に言語化し、検証するといった活動をくり返し行うことが重要であると考えられる。

児童・生徒質問紙調査では、「理科の授業の内容はよく分かりますか」について肯定的な回答が小学校・中学校ともに大阪府を上回り、小学校においては全国平均を上回っている。「理科の授業で、自分の考えや考察をまわりの人に説明したり発表したりしていますか」という質問では、中学校において肯定的な回答が大阪府・全国平均を上回っている。中学校では肯定的に回答した割合が全国、大阪府と比較しても高く、授業の中で生徒の観察・実験以外の活動の場が多く保障されていると考えられる。

（6）理科の学力向上に向けての方策

今回の全国学力・学習状況調査において、小学校では「予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想できることや、実験結果を基に自分の考えを改善したりすること」、中学校では「考察を条件制御の視点から見直し記述すること」および「自然の事物・現象に含まれる要因を抽出して整理したり、条件を制御して実験を計画すること」について課題があることから、理科の授業を改善するための方策を示す。

[1] 結果を見通して実験を構想できるようにする指導

- ・これまでの学習内容や、生活経験と関連付けて、根拠のある予想や仮説を発想し、図などで表現するなどして話し合うことができるように指導する。
- ・自分だけでなく、他者の予想が確かめられた場合に得られる結果の見通しも話し合うように指導する。

[2]実験結果を基に自分の考えを改善できるようにする指導

- ・ 予想したことや予想が確かめられた場合に得られる結果の見通しを話し合うことができるように指導する。
- ・ 実験後に、自分の予想と実験結果を比べるときに、他者の多様な予想も比べることができるように指導する。
- ・ 児童が構想した実験方法を実現できるように、検流を複数用いて行う等工夫する。
- ・ 観察・実験結果を基に分析して考察し、それを記述する際に自分の予想にとらわれずに事実と解釈の両方を表現できるように指導する。また、事実は的確に表現するように指導する。

[3]考察を条件制御の視点から見直し記述することの指導、および自然の事物・現象に含まれる要因を抽出して整理したり、条件を制御して実験を計画する指導

- ・ はじめに「変化すること（従属変数）」と「原因として考えられる要因」をすべて挙げ、それらの妥当性を検証し、それらの要因を「変える条件（独立変数）」と「変えない条件」に整理して実験を計画する学習場面を設定する。
- ・ 「原因として考えられる要因（独立変数）」の変化に伴い、「変化すること（従属変数）」がどのように変化するかという視点を踏まえ、課題解決の見通しが明確になる実験を計画できるように指導する。
- ・ 予想や仮説を立てる場面では、はじめに修得した知識・技能や日常生活の経験から、自分の考えを持つように指導する。
- ・ 自分の考えを、対話を通して生徒自身が検討して改善できるように、助言や問い返しをおこなう。
- ・ 考察の場面における話し合いでは、「予想や仮説と観察・実験の結果が一致しているかどうか」という視点や、課題に正対した考察になっているかなどの視点を明示する

3. 児童生徒質問紙調査結果の分析

①基本的な生活習慣

平成 30 年度の児童生徒質問紙調査の基本的な生活習慣に係る質問は、ゲーム時間やスマホ等を使用する時間を問う項目がなくなり、全 3 問となった。

熊取町の児童生徒の基本的な生活習慣に関する質問に対する回答結果と学力調査結果のクロス集計により、以下の点が明らかになった。

「毎日朝食を食べていますか」の質問に対して、小学校では、全く食べていない生徒の正答率が高い教科があるなど、質問紙の回答結果と学力調査結果の間に相関関係は見られなかった。一方、中学校では、肯定的回答をしている生徒の方が学力調査の正答率が高かった。「就寝時刻」「起床時刻」については、小中学校とも、顕著な相関関係はみられなかった。

平成 30 年度の熊取町の基本的な生活習慣に関する調査結果を、平成 29 年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校では「朝食を毎日食べている」「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」「毎日、同じくらいの時刻に起きている」と回答した児童の割合は減少しており、特に起床および就寝時間に関する肯定的回答は大幅に減少した。平成 30 年度の全国、大阪府の結果と比較しても肯定的割合は低い。

一方、中学校では、平成 29 年度の熊取町の結果と比較すると「朝食を毎日食べている」「毎日、同じくらいの時刻に起きている」と回答した生徒の割合は減少しているが、「毎日、同じくらいに寝ている」と回答した生徒の割合は増加した。平成 30 年度の全国、大阪府との比較では、「朝食を毎日食べている」割合は、全国より低く、大阪府よりも高かった。

基本的な生活習慣の確立は、子どもが成長していく上で重要であり、特に、栄養・睡眠・運動の 3 つ要素は非常に大切である。このようなことから、基本的な生活習慣について、児童生徒が自らの生活について自覚するとともに、保護者も含めてその重要性について理解することが必要である。

②家庭生活

平成 30 年度の児童生徒質問紙調査の家庭生活に係る質問は、家の人との会話や行事への参加を問う項目がなくなり、全 3 問となった。

平日の放課後の過ごし方について、小学校では、「友達と遊んでいる」「家でテレビやゲーム、インターネット等をしている」割合が最も高く（81.4%）、次いで「家族と過ごしている」（63.8%）であった。中学校では「家でテレビやゲーム、インターネット等をしている」（81%）、次いで「学校の部活動」（73.2%）の割合が高かった。平成 29 年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校では「友だちと遊ぶ」割合は変わっていないが、「テレビ

やインターネット等をしている」割合が大幅に増えている。中学校においても、部活動や学習塾の割合が増えるとともに、テレビやインターネットの割合が大幅に増加している。

週末の過ごし方については、小学校は「テレビやゲーム、インターネット等をしている」と回答した割合が81.4%で最も高く、「家族と過ごしている(80.3%)」がその次であった。中学校についても、「テレビやゲーム、インターネット等をしている(77%)」で最も高く、次いで部活動が61%であった。週末の過ごし方をみても、現在の児童生徒の一日の過ごし方についての特徴がよく現れており、平日の放課後や週末においても、テレビやインターネット等に費やす時間が長くなっているといえる。

家の人との対話については、小学校では、「学校での出来事について話をする」割合は大阪府よりもやや高く、全国よりもやや低い結果であった。中学校では、学校での出来事について話をする割合は71.4%で、大阪府よりもやや低く、全国よりも低い結果であった。平成29年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校においては強い肯定的回答が増えているが、全体的には小中学校とも肯定的割合は若干減少したものの、平成29年度とほぼ同じ状況であった。

クロス集計結果を見ると、「家の人と学校の出来事について話をしますか」の質問に対して、小学校では、肯定的回答をしている児童の方が学力調査の正答率が高い傾向にあった。中学校においては、顕著な相関関係が見られ、「全く話していない」生徒の正答率は極端に低かった。

子どものよりよい成長のためには、家庭生活が重要であり、学校と家庭が協力することが不可欠である。熊取町の小中学生は、家庭でコミュニケーションをとる割合は、経年比較するとやや低くなりつつあるものの、大阪府とほぼ同じような状況である。今後も地域ぐるみで子育てが出来る環境作りを進めていくことが必要である。

③学習時間等

平成30年度の児童生徒質問紙調査の学習時間等に係る質問は、塾での学習時間等を問う項目がなくなり、全2問となった。

学習塾や家庭教師を含んだ家庭での学習状況をみると、小学校においては、1日「1～2時間学習している」割合が最も高く、次いで「30分～1時間」であった。一方、中学校においては、「1～2時間」が最も多く、次いで「2～3時間」であった。中学校の全国平均、大阪府平均についても「1～2時間」が最も多い。平成29年度は「2～3時間」と回答した割合が最も高かったことから、中学校での学習時間は昨年度よりも短くなった。また、「全く平日に勉強をしない」割合は、小学生は4.9%、中学生は5.9%で、小学生は昨年度よりも0.8ポイント、中学生は3.3ポイント減少している。昨年度は、中学生の「全く勉強しない」割合は、9.2%で全国の約2倍であり、課題であったが、大幅に減少した。

学力調査結果と家庭学習時間の関連性を見ると、小中学校とも正の相関関係が見られた。

学校以外での平日の読書時間については、昨年度は、小中学生とも、「2時間以上している」と回答した割合は全国よりも若干低く、大阪府よりも高い結果であったが、平成30年度は、小中学校とも、全国、大阪府よりも低い結果となった。全く読書をしない割合は、小学校で29.9%、中学校で53.8%にのぼり、昨年度の調査結果と比較すると、小中学校とも増加しており、読書離れが懸念される。これは、昨今、インターネットが普及し、コンピュータや携帯電話、スマートフォンで手軽に検索できることが影響していると推察される。

学力調査結果と読書時間との関連性については、小学校においては相関関係は見られたが、中学校においては見られなかった。

以上の結果から、熊取町の児童生徒の家庭学習の状況は改善されてきており、家庭学習の方法を提示したり、自学自習を進めたりするなど各学校の取り組みの成果として、児童生徒の家庭学習の習慣が定着しつつあるといえる。しかし、読書時間については、全国や大阪府と比較して不足している傾向にあることが明らかとなった。今後も、学校図書館司書による読み聞かせや朝の読書活動において、児童生徒がじっくり本に向き合える時間を確保するとともに、それらの経験を通して読書の楽しさを感じ取ることができるよう引き続き学校全体で図書館教育を進めていくことが重要である。

④学校生活・規範意識

平成30年度の児童生徒質問紙調査の学校生活・規範意識に係る質問は、「学校が楽しいか」など学校生活に関する満足度および学級での様子に関する質問がなくなり、全3問となった。

「先生は、あなたのよいところを認めてくれますか」（学校生活に関する質問）については、小学校での肯定的回答は79.3%で、全国より6ポイント、大阪府より5.2ポイント低く、「どちらかといえば、あてはまらない」の割合は全国、大阪府よりも高い。中学校においては、肯定的回答の割合は75.3%で、全国より6.9ポイント、大阪府より2.7ポイント低くなっているが、「あてはまらない」の割合は全国、大阪府よりも低い。

昨年度の調査結果と比較すると、小学校においては「そう思う」と回答した割合が7.9ポイント減少している。一方、中学校では「どちらかといえばそう思う」の割合が増加するとともに「あてはまならない」の割合が減少している。昨年度課題であった中学生の教職員に対する意識について、各校においてその原因や背景を明らかにし、取り組んだ成果であると考えられる。しかし、先生に対して「よいところを認めてくれる」と感じている児童生徒の割合は、全国、大阪府よりも低い状況であるため、引き続き、教職員は児童生徒とのコミュニケーションを大事にし、表情、ジェスチャー、言葉でもって児童生徒のよさを伝え、互いのもちあじを認め会える集団づくりを進めていく必要がある。

規範意識に関わる質問は「学校のきまり（〔中〕規則）は守っていますか」「いじめはど

んな理由があってもいけないことだと思いますか」の2問だった。

学校のきまり（〔中〕規則）は守っていますか」の質問に対し、小学校における肯定的回答の割合は86.5%で、全国よりも低く、大阪府よりも高かった。また、平成29年度の熊取町の結果と比較すると、8.4ポイント低下している。中学校においては、肯定的回答の割合は92.3%であり、全国よりも低く、大阪府よりもやや低い。平成29年度の熊取町の結果と比較すると、5.0ポイント低下している。

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」については、肯定的回答の割合は、小学校で97.2%、中学校では93.9%であった。平成29年度の熊取町の結果と比較して、小学校では2.0ポイント、中学校では2.1ポイント増加した。しかし、小学校で6.1%、中学校2.8%の児童生徒が否定的な回答をしており、これらの児童生徒への対応が課題である。学校の日々の取り組みや、家庭、地域との連携を図ることにより、児童生徒の理解の促進や意識改革に取り組むことが重要である。

学校生活や社会生活を営む上で、規範意識を身につけることは必要不可欠である。社会全体の規範意識の低下が叫ばれる中、学校のみならず、家庭、地域の大人が現状をしっかりと認識し、率先して規範意識を守ることの大切さを身をもって示すことが必要である。

⑤家庭学習

平成30年度の児童生徒質問紙調査の家庭学習に係る質問内容は、全3問であった。

「家で自分で計画を立てて勉強をしますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、62.6%で、全国、大阪府よりも低い。一方、中学校においては肯定的な回答の割合は、55.2%で、全国、大阪府よりも高い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では6.5ポイント、中学校では5.5ポイント増加した。

「家で学校の宿題をしますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、98.4%で、全国、大阪府よりも高かった。一方、中学校においては肯定的な回答の割合は、85.7%で、全国、大阪府よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では同じ、中学校では12.8ポイント増加した。

「家で学校の授業の予習・復習をしていますか」の質問に対して、小学校における肯定的回答は51.5%で、全国よりも低く、大阪府よりもやや低かった。中学校においては48.3%で全国よりも低く、大阪府よりも高かった。昨年度は、予習・復習については、別々に問われたため、昨年度との比較はできない。

学力調査結果との相関関係については、小中学校とも、自分で計画を立てて勉強をしている児童生徒ほど、学力調査の正答率が高かった。家での宿題については、小学校の基礎問題（A問題）のみ、相関関係が見られた。家での予習・復習については、小学校では相関関係は見られなかったが、中学校では見られた。このことから、小学校段階での宿題は基礎学力を高めるものであり、中学校段階では主体的に予習・復習することが基礎基本の定着および思考力等の向上につながっていると捉えることができる。学習内容の着実な定

着を図るため、宿題、予習、復習等の家庭学習の習慣を身につけることは非常に大切であり、今後も保護者と連携しながら取り組みを進めたい。

⑥自尊感情・将来に対する意識

平成 30 年度の児童生徒質問紙調査の自尊感情については 1 問、将来に対する意識については 2 問であった。

「自分には、よいところがあると思いますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、78.9%で、全国、大阪府よりも低い。中学校においては肯定的な回答の割合は、77.2%で、全国よりもやや低く、大阪府よりも低い。昨年度の熊取町の結果と比較すると、小学校では 1.0 ポイント減少、中学校では 13.7 ポイントと大きく増加した。

自尊感情は幼少期からの様々な体験や、成就感、達成感等を味わうことにより育まれるものである。学校においては、この結果を踏まえて、児童生徒一人ひとりを大切にしながら日常の教育活動を行うとともに、保護者、地域に対してもその必要性を啓発することが必要である。

「将来の夢や目標を持っていますか」の質問に対して、小学校における肯定的回答は 85.6%、中学校においては 64.5%で、いずれも全国、大阪府よりも高かった。学力調査結果との相関関係は、小中学校とも見られなかった。

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問については、肯定的回答の割合は、小学校で 95.8%で、全国、大阪府よりも高かった。一方、中学校においては 93.2%で全国よりも低く、大阪府と同じだった。平成 29 年度の熊取町の結果と比較して、小中学校とも増加している。このことから、学校や家庭において、自分の役割を果たすことで周りから感謝されたり、自ら達成感を味わったりする経験をしていると考えられる。

⑦社会生活、地域との関わり・社会に対する興味・関心

社会に対する興味関心についての質問は 4 問あった。「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」の質問に対して、小学校においては肯定的回答の割合が 60.3%、中学校では 53.1%で、小中学校とも全国よりも低く、大阪府よりもやや高い。

「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」については、小学校では 43.4%が肯定的回答で、全国よりも 16.5 ポイント、大阪府よりも 0.8 ポイント低かった。一方、中学校では肯定的回答の割合が 37.5%で、全国よりも 1.2 ポイント、大阪府よりも 3.4 ポイント高く、昨年度の比較においても 5.2 ポイント増加した。

「新聞を読んでいますか」の質問に対して「ほとんど、または全く読まない」と回答し

ている小中学生の割合は、69.1%、79.6%にのぼる。「テレビやインターネットでニュースを見ますか」の質問に対して、小学生において「よく見る」は51%、「時々見る」と回答している割合を加えると81.9%、中学生において「よく見る」は46.5%、「時々見る」と回答している割合を加えると82.7%である。小中学生とも、インターネットが普及する中、新聞ではなく、インターネットやスマートフォンでニュースを視聴する割合が高くなっていると考えられる。

社会生活、地域との関わりについての質問は4問あった。「5年生（〔中〕1・2年生）までに受けた授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があったと思いますか」の質問については、小中学校とも全国よりも低く、大阪府より高い。平成29年度と熊取町の結果と比較すると、肯定的な回答は、小学校ではほぼ変わらず、中学校では22.2ポイントと大きく増加した。

「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」に対する肯定的な回答は、小学生では63.5%で、全国、大阪府より高い。中学生では44.8%で、全国とほぼ同じ、大阪府より高い。だんじり祭等もあり、本町の児童生徒の地域行事への参加率が高くなっていると考えられる。

「地域社会などで、ボランティア活動に参加したことがありますか」については、小中学校とも全国とほぼ同じ、大阪府より小学校では12.1ポイント、中学校では10.8ポイント高い。平成29年度の熊取町の結果と比較すると、小中学校とも増加した。

「地域の大人（学校や塾、習い事の先生を除く）に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか」については、小学校では39.9%が肯定的回答で、全国、大阪府よりもやや高かった。中学校では28.7%で、全国よりも3.2ポイント、大阪府よりも3.6ポイント高く、昨年度の比較においても5.6ポイント増加した。

核家族化が進み、地域での人と人とのつながりが希薄になっていると言われていの中で、「地域の子どもを地域で育てる」といった意識を持ち、子どもの成長を見守る体制作りが必要である。熊取町においては、祭りを中心として、子ども会活動や自治会活動等を通して地域のつながりは強いと言われているが、今後も地域ぐるみで子どもを育てるという意識の啓発が求められる。